



上空から見た建設中の「島式漁港」(写真提供：岩城町)。左は13年度修築事業概念図。南防波堤・突堤の工事が行われる。

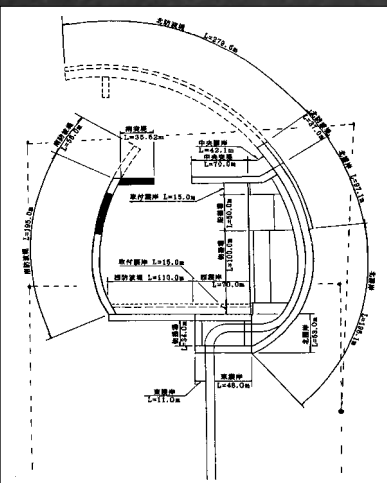
砂浜域に展開する漁業・観光の複合的振興策（岩城町）

旧藩に因んだ亀田地区の3つの「城」を拠点にまちづくりに取り組んできた岩城町。その一方で、海岸部の道川地区では現在、平成2年に工事着手した本州初の「島式漁港」を中心とした、漁業と観光を両立する「第4の拠点」建設が進んでいます。

旧藩の歴史を資源とし

展開した亀田地区

かつて亀田藩2万石の城下町として栄えた岩城町亀田地区。町内には往時の風情や情緒を伝える名所・旧跡が点在しています。城のあったとされる高城山には現在、町の歴史・文化資料等を展示する「天鷲城」、本陣を再現した本格的な美術館「亀田城」、特産品であるプラムワインの製造工場「天鷲ワイン城」の3つの城



が集中して設置され、県内でも有数の観光拠点となっています。これらの亀田地

区を中心とする活性化事業は教育、産業振興、また雇用創出等様々な効果を生み出しており、その取り組みが評価され、平成9年度には全国過疎地域活性化連盟会長賞を受賞した上、人口減少にも歯止めをかけ、平成12年には過疎を脱却しています。

一方、道川地区は海岸線に面しており、隣接する秋田市、本荘市を通して切れ目なく砂浜が続いています。夏は道川海水浴場、またレジャーブールを備えた秋田厚生年金休暇センターがあり、その海岸線の特徴を生かしたマリンスポーツを楽しめる地域です。こうした条件から、今年アジアでは初めて日本で、しかも本県で開催されるスポーツの祭典「ワールドゲームズ」のライフセービング競技の会場にも選定されました。

漁港建設に不向きな 砂浜海岸でのアイディア

海岸に面していながら、岩城町には「漁港」がなく、これまで漁業従事者は砂浜から船を陸に上げていました。漁民の声に応え、当初、通常の手法による漁港建設を計画しましたが、砂浜であるがゆえ、漂砂の堆積による多額の浚渫（しゅんせつ）維持費用がかさむため、断念せざるを得ませんでした。

そこでモデルとなった手法が、水産庁主導で試験的に計画され、昭和59年に着工した北海道長万部町の「島式漁港」でした。この方式は、海岸から離し、砂の移動の少ない沖合へ島を設けることにより、港内に砂が打ち寄せるのを防ぎ浚渫費用を大幅に削減するもので



2年魚。体長も40cmほどに達する。



養殖場内の様子。大小17もの水槽が並び、

昭和50年代から、岩城町では漁業振興策として「ロブスター」の養殖に取り組んできました。カナダ・ケベック州に技術指導を仰ぎ、当時珍しかったロブスターを生産した経緯があり、同町は県内でも高い養殖技術を持っていました。輸送技術の発達とともにロブスターの生

す。また、曲線的なデザインにより周辺の海岸・海流等と与える悪影響も最小限に抑えます。連絡橋とあわせると、「プラムワイン」を特産とする同町にはびつたりのワイングラス型となります。

昭和61年、第一種漁港の指定を受け、2年後に計画決定。平成元年には管理者を町から県に変更するなどの経緯のち、平成2年1月工事着手、現在のところ、平成17年度の完成を目指しています。

漁業振興を図る 付帯施設の養殖事業

産はコスト割れを余儀なくされたため、現在は輸入に頼っています。

漁港建設に伴い、同町は養殖場を付帯施設として建設。ヒラメの養殖に取り組んでいます。全国の他の生産地より長い2年〜2年半のサイクルで40cm以上に育った個体を、市場の相場を見極め全国に向け出荷。開始より10年の間安定した生産を保ってきましたが、ここ2年は海水温が上昇し生産量を落とすなど、気候に左右される管理技術の難しさも合わせ持っているため、現在は研究者を配し管理するなど対策を講じています。今後は研究所の設置や魚種の拡大等により町独自の養殖技術



道の駅から見た建設現場。連絡橋は350m以上もある。

の確立・さらなる漁業振興を図っていく計画です。

観光事業との連携による 「第4の拠点」づくり

平成6年度「ふれあい漁港漁村整備」事業に認定された「道川漁港」は、周辺の海域・沿岸を含めそれぞれを目的別にエリア分けすることにより、

漁業・観光・レジャー、定住等複合的な役割を担う交流拠点として整備されることになりました。建設中の島式漁港への連絡橋「アイランドブリッジ」と、海岸線に沿って走る国道7号線の接点となる位置には、情報提供施設のほか交流ターミナル、温泉、活魚センターを備えた「道の駅・岩城」が昨年5月にオープン。前後の道の駅との距離も約40km・20kmと、位置的にも好条件な上、立体交差により進入し易い形態もあり、利用者は急速に増加しています。さらに、今年度中には北側にコテージ5棟、炊飯棟、トイレ等を備えたオートキャンプ場がオープンします。海岸に隣接したこの施設は、マリンスポーツの拠点としての相乗効果が期待されています。

また、7号線と平走する羽越本線には、周辺住宅地の整備にあわせ、「パークアンドライド」式の新駅の構想があり、程近い交流拠点との有機的な連携が考えられるほか、平成14年度に完成する日本海沿岸東北自動車道岩城ICにより、利用者の倍増もまた見込まれています。



「道の駅・岩城」正面。手前から活魚センター、情報提供施設、交流ターミナル、温泉施設と並び、